

19	安城	志貴小学校	オカダ ショウコ 岡田 祥子
分科会番号	3	分科会名	社会科教育（小学校）

研究題目

ニュース制作を通して、情報産業を実感的に理解し、
多面的に捉える児童の育成
—「Shiki show 1分 News」の実践を通して—

研究要項

1 はじめに

近年、ICTの発達やインターネット、SNSの普及により、情報化社会は一層加速している。私たちは日常生活の中で、テレビや新聞、インターネットなど様々なメディアを通して情報を得ており、情報は生活や社会を支える重要な役割を担っている。その背景には、情報を正確かつ迅速に届けるために、情報産業に携わる多くの人々の工夫や努力がある。

こうした社会の中で、児童には情報を主体的に収集・判断し、適切に活用する力がこれまで以上に求められている。小学5年生である本学級の児童も、SNSや動画共有サービスなどを利用しており、日常的に情報を送受信している。しかし、その責任や影響については十分に理解しているとは言えず、インターネット上での情報のやり取りをきっかけとしたトラブルも見られた。このような実態から、情報を受け取るだけでなく、発信する側の立場や責任についても実感を伴って考える学習が必要であると考えた。

一方で、児童が産業の仕組みや働く人の工夫や努力について理解を深めることは安易なことではない。第5学年の社会科では、情報産業の他に農業や工業など多様な産業を学習する。身近な地域を取り扱う中学年の学習と比べ、児童が実際に生産者と関わったり、その立場を体験したりする機会は少なく、資料や映像を基に思考する学習が展開されることが多い。この「学習者と学習対象との隔たり」が、社会的事象を自分事として捉えづらくしているのではないかと考えた。

そこで、本研究では、児童自身が表面的な理解にとどまらず、実感的に理解を深めていく体験活動中心の単元を構想することにした。単元の中心に「Shiki show 1分 News」というニュース制作を位置づけ、情報産業に携わる人々の苦労や工夫、責任を実感できるようにする。また、自分たちで制作したニュースを視聴し合うことで、情報を発信することの利便性や危険性についても実感できるようにする。このような学びは、社会的事象を多面的・多角的に捉え、自分たちの生活との関わりを考える社会科の学びにつながる。本研究では、情報の送り手と受け手双方の視点を往還するニュース制作を通して、情報産業を多面的に捉え、自分との関わりについて主体的に考える児童の育成をめざした。

2 めざす児童の姿

本研究では、ニュース制作という体験活動を通して、情報の送り手と受け手双方の視点を往還しながら、情報産業を多面的に捉え、自分との関わりについて主体的に考える児童の育成をめざす。そのため、本研究で目指す児童の姿を次のように設定した。

- ・情報を発信する立場を体験し、情報産業に携わる人々の工夫や苦労、責任について実感を伴って理解する児童
- ・送り手と受け手双方の視点を往還しながら、情報を発信することの利便性や危険性を多面的に考える児童
- ・情報産業の発展を自分事として捉え、情報との関わりについて自ら判断しようとする児童

3 研究の構想

(1) 研究の仮説

<仮説 1>

ニュース制作という体験活動を単元を中心に位置づければ、児童は情報を発信する立場を経験し、情報産業に携わる人々の工夫や苦労、責任を実感的に理解することができるであろう。

<仮説 2>

制作したニュースを送り手と受け手双方の立場から振り返る活動を取り入れれば、情報産業を多面的に捉え、自分との関わりについて考えることができるであろう。

(2) 研究の手立て

<仮説 1 に迫るための手立て>

手立て①

ニュース制作の前に、ニュース制作の工程や視点（正確さ・迅速さ・視聴者意識など）に興味・関心を高める学習活動を行う。

手立て②

「Shiki show 1分 News」の制作を位置づけ、取材・編集・放送まで一連の流れを体験する探究活動を行う。

<仮説 2 に迫るための手立て>

手立て③

PDCA サイクルやレーダーチャート評価を取り入れたワークシートを活用し、ニュース制作に必要な視点を一貫して働かせる。

手立て④

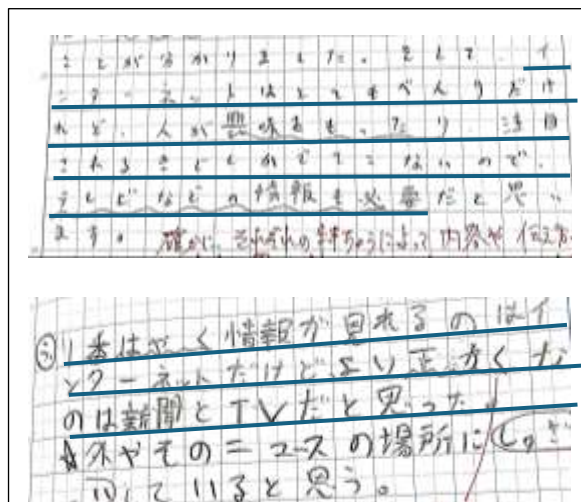
編集会議や視聴会を行い、送り手と受け手双方の立場からニュースを見直す機会を設ける。

4 研究の実践

(1) 情報産業について課題意識をもつ（手立て①）

第1～3時では、情報産業への課題意識や、ニュース制作に必要な工程や視点（正確さ、迅速さ、視聴者意識など）を児童自身が得られるように学習を進めた。

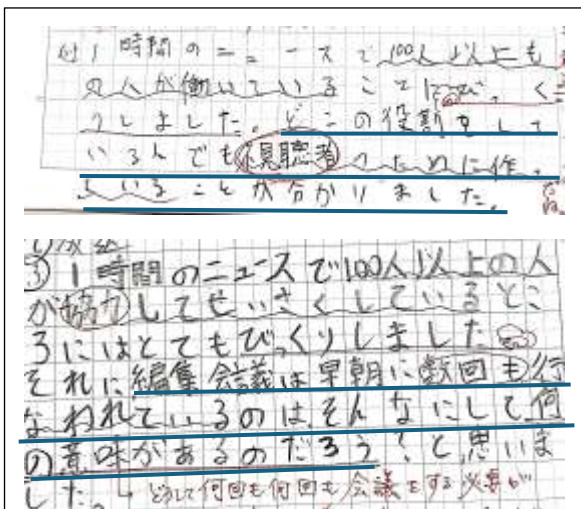
第1時では、情報を得る様々な手段について話し合い、テレビや新聞、インターネットなど多様なメディアを挙げた。児童の主な情報源であるインターネットに意見が集中した場面で、「インターネットだけあれば十分ではないか」と問い返したことで、それぞれの特徴やメリット・デメリットについて目を向けることができた。児童の振り返りからは、各メディアを自分



【資料1】第1時の児童の振り返り

なりに評価する意見や、情報産業の問題点に気付く記述が見られた。【資料1】

第2時では、ニュース番組がテレビで放送されるまでの工程について調べ学習を行った。取材や原稿作成、撮影、編集など多くの工程があるとともに、ディレクターやカメラマン、アナウンサーなど様々な人が携わっていることを理解した。中でも、1時間のニュース番組に100人以上の人が携わっているという事実に対して驚きの声があがった。そこで、「なぜ、それほどの人が必要なのか」と問うことで、「速く正確に伝えるため」「複数人で内容を見直すため」などの意見が出され、情報産業に携わる人々が、正確で迅速に情報を届けるために様々な工夫や役割分担を行っていることに目を向けることができた。児童の振り返りからは、多くの人でニュースを作っていることに理解を示しつつも、なぜそこまでするのか実感が湧かない思いも記されていた。【資料2】



【資料2】第2時の児童の振り返り

第3時では、「ニュース作りで大切なことは何か」について考えた。児童からは、「役割分担」「視聴者目線」「内容の正確さ」「効果的な編集」など、多様な視点が挙がった。しかし、動画配信に馴染みがある児童の多くは、映像や音声などの演出効果に意識が集中した。そこで、教師が過度な演出を施した根拠のないニュース動画を提示した。初めは動画の見栄えに感心していた児童も、「これって本当のことなのかな」というつぶやきから、情報の正確さを

考え始めた。振り返りからは、「もし私がアナウンサーだったら」と、送り手の視点を持ち始めている記述や、根拠のない情報が人々に与える影響について考え始める記述が見られた。【資料3】

(2) ニュース制作を通して情報産業を多面的に捉える（手立て②③④）

第4～8時では、ニュース制作という体験活動を通して、情報産業に携わる人々の工夫や苦勞、責任について実感的に理解するだけではなく、情報の送り手と受け手双方の視点を往還しながら、情報産業を多面的に捉えることをねらいとした。ニュース番組名を「Shiki show 1分News」、視聴者を「志貴小学校の児童」と設定

することで、「誰に」「何を」「どのように伝えるのか」を意識できるようにした。また、ニュース制作は、PDCA サイクルを取り入れたワークシートを活用することで、本時の課題や活動

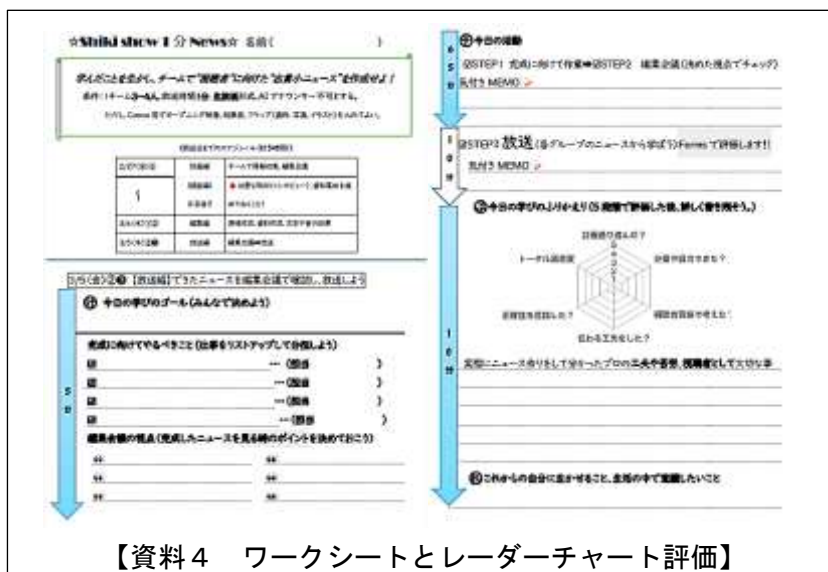
内容、編集会議の視点を明確にし、探究的な学びが実現できるようにした。さらに、これまでの学びで獲得した「役割分担」「視聴者目線」「伝わる工夫」「正確性」等の視点をレーダーチャートにして評価することで、学習を一貫して働かせることができるようにした。【資料4】

第4時では、テレビ東京「60秒で学べるNews」を視

聴し、自分たちも1分間のニュース番組を制作するという見通しをもった。初めは、何をテーマにしようか悩んでいたグループも、ニュース制作の視点を想起することで、「休み時間の過ごし方についてはどうかな」「アンケートやインタビューを資料にしよう」など、進んで計画を話し合う姿が見られた。

第5時では、各グループがアンケートやインタビューを行い、ニュースの根拠となる情報を収集した。制作には一人一台タブレット端末を使用し、必要な情報をインターネットで調べたり、Canvaで動画編集を行ったりした。また、ChatGPTで原稿の構成を整理したり、ニュース動画を視聴したりするなど、目的に応じてICTを効果的に活用する姿が見られた。ま

【資料3】第3時の児童の振り返り



た、原稿作成、資料作成、動画編集などの役割を分担することで、一人一人が自分の役割に責任をもち、協力しながら活動を進めることができた。ワークシートの活用により、本時の課題や視点が明確となり、自律的な探究につながったといえる。【資料5】

第6～7時では、作った番組を見直し、編集会議と修正作業を行った。実際のニュース番組と同様、制作時間を最小限に設定したことで、計画的に活動を進めることや役割分担の大切さを実感し、回を重ねるごとに連携も深まっていった。編集会議では自らのニュースを視聴し、「音楽がニュースの内容に合っていない」「インタビューの結果に説得力がない」など、視聴者の立場で批判的に見直す姿が見られた。また、他グループの番組を見合う視聴会を設けたことにより、「分かりやすい言い回しを使うこと」「聞き取りやすい話し方をすること」「資料を効果的に示すこと」など、新たな視点到気付くことができた。【資料6】児童は送り手と受け手の視点を往還させながらニュースを見直すことで、送り手として情報を正確かつ分かりやすく伝える責任と、受け手として情報を批判的に受け止める必要性の双方から情報産業を捉える姿が見られた。

第8時の放送を終えたレーダーチャート評価では、「計画」「分担・協力」「視聴者目線」「伝わる工夫」「正確性」「満足度」の全ての項目で学級平均値が向上した。【資料7】特に、「伝わる工夫」や「正確性」の伸びが大きかったことから、編集会議を繰り返す中で、送り手の工夫を追究するだけでなく、正しい情報を発信する責任や、視聴者の需要に応えることの重要性について実感を伴って理解できたことがうかがえる。児童の振り返りには、「たった1分のニュースでこんなに大変だなんてびっくりした。1時間のニュースを作るために100人いる理由が分かった」「ニュースを作るのに、何度も編集会議がある意味が分かった」「視聴者目線を意識して、文字や音声などを工夫していくことが大変だと分かった」など、実際にニュースを制作したからこそ分かったことや感じたことが多く記されていた。また、「視覚的な効果をただ使えばよいわけではないことが分かった。ニュースを鵜呑みにしないように観たい」という記述からは、送り手の意図によって情報の伝わり方が変化することから、情報の本質を見極めようとする姿がうかがえた。



【資料5 制作の様子】



【資料6 視聴会の様子】

評価項目	学級平均
計画	3. 7
分担・協力	3. 7
視聴者目線	3. 6
伝わる工夫	2. 5
正確性	3. 1
満足度	3. 2

第4時（制作開始時）

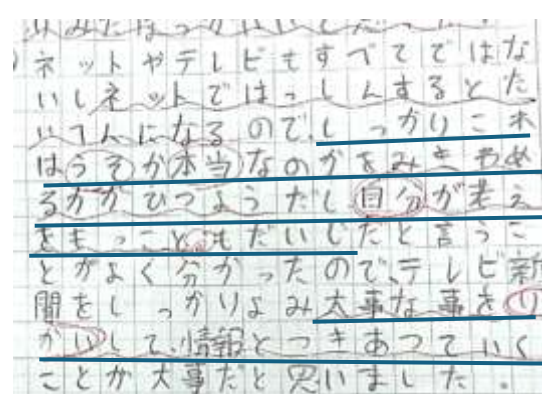
評価項目	学級平均
計画	4. 4
分担・協力	4. 5
視聴者目線	4. 5
伝わる工夫	4. 6
正確性	4. 4
満足度	4. 0

第8時（放送後）

【資料7 レーダーチャートの値の変化】

(3) 情報産業とのかかわりについて自分なりに判断する

第9時では、第1時と同じ「情報産業とは何か」という課題に立ち返り、これまでの学びを振り返った。第1時では、「マスメディアのこと」や「情報が得られて便利」など、表面的な知識や考えが多かったが、ニュース制作を体験したことで、「たくさんの人が役割を分担し、何時間も準備をしたニュースを毎日発信していてすごい」「伝えたいことが正しく、分かりやすく伝わるように、難しい機械操作をしているプロは優秀だ」など、情報産業を支える人々の工夫や努力を実感的に語る姿が見られた。また、「今までの自分はプレゼンなどの時に適当に資料を選んでいただけ、内容に合っていなければ効果がないと思ったから、説明と資料の関連を気を付けていきたい」と述べた児童は、情報の伝え方によって受け手に与える影響が変わることに課題意識を高めたようであった。そこで、「情報の受け手は、どうしていけば良いか」と問い返したところ、「情報を理解することが大切」と答えが挙がった。続けて、「情報を理解するとはどういうことなのか」と問うと、「グラフなどの資料と照らし合わせて、本当だなあと感じること」「情報には多面性があるから、自分の考えを巡らせる必要がある」と、情報を複数の視点から捉え、自ら判断することの大切さへと考えを深めていった児童の振り返りには、「しっかりこれはうそか本当なのかを見極める力が必要だし、自分が考えをもつことも大事。(中略)大事なことを理解して情報と付き合っていくことが大切」など、情報産業との関わりについて主体的に判断する記述が見られた。



【資料8】第9時の児童の振り返り

【資料8】

5 成果と課題

成果として、ニュース制作という体験活動を単元の中心に位置づけたことで、児童は情報産業に携わる人々の工夫や苦労、責任について実感を伴って理解する姿が見られた。一人一台のタブレット端末を活用した取材・編集・発信の過程は、児童がニュース制作を体験的に学ぶことを可能にし、送り手と受け手双方の視点を往還しながら、情報産業を多面的に捉える学びにつながった。また、また、PDCA サイクルやレーダーチャート評価を用いて学習を可視化したことで、これまでの学習で獲得した視点を一貫して働かせながら学習に取り組むことができ、情報を主体的に判断しようとする態度の育成につながった。

課題として、ニュース制作はタブレット端末の活用により児童が体験しやすい学習であった一方で、漁業や工業など他の産業では、生産者と同じ立場を児童が実際に体験することは難しく、単元によって「実感を伴う学び」の成立条件に差が生じる可能性がある。今後も、社会的事象を自分事として捉えられる学習活動をどのように位置づけるかについて研究を進めていきたい。